

はじめに

一九九一年のイスラエルへの移住から、早くも二十五年が経とうとしている。イスラエルに暮らしてよかったことはあまりないが、この人に会えたことはよかったと思う人が一人いる。それはモルデハイ・ヴァヌヌである。

イスラエルは建国以来、パレスチナ人に対する弾圧・攻撃を徹底してきた。普通の神経をしていれば、イスラエルのやっていることは人道的に間違っていると感ずるはずなのだが、一般のイスラエル人はそうは感じない。パレスチナ人はテロリストなのだと言われ洗脳教育を受けて育つからである。

自国のやり方を批判するユダヤ系イスラエル人はごく稀であるがヴァヌヌは、自国のアラブに対するやり方を、激しく非難し続けてきた。

一九五〇年代から、イスラエル南部の砂漠の町デイモナーにある核開発研究所では、核爆弾が密かに製造されていたが、政府は研究所の目的は平和利用だと断言していた。

一九七六年、ヴァヌヌは、核兵器が製造されている工場だとは知らずに、核開発研究所に就職し、勤めているうちにそこが単なる研究所ではないことに気づいた。時とともに彼は、「このままではパレスチナ人を筆頭に、全アラブ諸国がイスラエルの核兵器によって全滅させられる」という危機感を抱きはじめ、九年間科学技術者として勤務し続けるうちに、その危機感は深まった。

「イスラエルが極秘のうちに着々と進めている核兵器開発計画を止めさせなければならぬ。そのためにはまず事実を世界に知らせることが第一歩だ。イスラエルが進めているデイモナーの核開発研究所の実態を世界に向けて発表しなければならない」

ヴァヌ又はこう考え、暴露準備の計画を練った。夜間勤務のマネージャーに昇格していた彼は、所内にカメラを持ち込み、研究所内の内部を計五十七枚撮影した。

政府がメディア操作しているイスラエル国内では、ニュースとして発信されることはあり得ない。しかも、そんなことをすれば、即、国家機密暴露の罪で逮捕され、よくて刑務所行き、悪ければ暗殺されることが容易に想像できた。そこで海外メディアにイスラエルの核兵器の実態を伝えようと考えた。

占領政策に突き進むユダヤ社会がつくづくイヤになり、旅先のオーストラリアでキリスト教に改宗したヴァヌ又は、一九八六年、イギリスの『サンデー・タイムズ』紙にイスラエルの核兵器開発計画についての内部告発書を、自ら撮影した写真の数々とともに渡したために、モサド（イスラエル秘密諜報機関）に追われるようになった。

イタリアでモサドに捕まった彼は、船でイスラエルに連れ戻され、「イスラエルを裏切り、スパイ行為を行なった」罪で十八年間刑務所に拘束された。そのうちの十三年間は独房だった。

ヴァヌ又は二〇〇四年に刑務所から釈放されたが、国外や占領地に行くことは許されず、外国人と口を利いてはならないなど多くの規制を受けたにもかかわらず、求められるままに外国人ジャーナリ

ストのインタビューに応じ続けた。

その結果、「外国人と接触し、外国人のインタビューに答え、西岸地区に出かけた」罪で、六年近くにわたる裁判が繰り返され、二〇一〇年夏、最高裁判所の判決により、彼は再び約三カ月間独房に入れられた。

二度目に釈放された今も、言動、移動の自由を奪われたまま、ヴァヌヌは生きている。プライベートの相談に乗ってくれ、打ち明け話をするに興味を持つて真剣に聞いてくれる、私にとつて頼れる師^レであり、と同時に、^レ気心の知れた友^レであるモルデハイ・ヴァヌヌについて私が知っていることと、私がイスラエル国内で体験した様々な興味深い事柄について書きたいと思う。

二〇一六年十一月

ガリコ美恵子

反核の闘士ヴァヌヌと私のイスラエル体験記 目次

第1章 ヴァヌアの闘い

- イスラエルへの移民 2 デイモーナ核開発研究所 6 アラブ人学生との出会い 8
デイモーナ核開発研究所を解雇される 10 チエルノブイリ・シヨック 12
ロンドンのメデアアで暴露へ 14 モサドに拉致される 19 イスラエルの核開発を世界に告発 22
十八年間の獄中生活 24 イスラエル国内の反応 25 世界に広がる支援者 29

第2章 イスラエルに暮らして

- 何も知らずにイスラエルへ 34 ユダヤ教徒の暮らし 38 ヴイザ取得の苦勞 42
ヨセフとの再婚、そして離婚 47 職を転々として出会った人々 51 イスラエルの兵士たち 56
イスラエルは変な国 63 怒れるパレスチナ人——第二次インティファダ 67
分離壁の地ならしは不法労働者で 71 パレスチナとの出会い 77
元兵士による写真展「ブレイキング・ザ・サイレンス」 82

第3章 パレスチナ連帯へ踏みだす

- ヴァヌア積放 90 ノーベル平和賞辞退の手紙 94 第二次レバノン侵攻 96
パレスチナ連帯への一歩を踏み出す 98 イスラエルの心ある人々 104

身分証明書とは何なのか	108	イスラエル軍と検問所	113	ヴァヌヌとの出会い	116
-------------	-----	------------	-----	-----------	-----

第4章 ヴァヌヌ再び刑務所へ

土地を奪われ、水も奪われたパレスチナ	120	アラビア語を学びながら	127		
友情の芽生え	131	ヴァヌヌが教えてくれたこと	137	広島原爆記念日の連帯デモ	140
釈放後も続くヴァヌヌの闘い	146	ヴァヌヌ再び刑務所へ	150		

第5章 ヴァヌヌに自由を

最初の夫シモンの死	160	ヴァヌヌ再釈放	163	エジプト革命に連帯する	168
ヴァヌヌ家唯一のディナー招待者	173	姑が作ったオクラ料理	178		
息子——娘の異母兄現われる	184	二〇一一年八月六日、再びの連帯デモ	190		
戦争難民への仕打ち	192	変わりつつあるイスラエル	196	医療にも及ぶパレスチナ差別	202
イスラエル人左派とヴァヌヌ	207	パレスチナを分断する「E1」プラン	210		
おそい春	215	ヴァヌヌの闘いは続く	219		

【参考資料】 225

ヴァヌヌからのメッセージ（二〇一二年九月二二日）	226
あとがき——モルデハイ・ヴァヌヌに	228

第1章 ヴァヌアの闘い

1 イスラエルへの移民

モルデハイ・ヴァヌスは、一九五四年十月十三日、父シユロモ、母マザルのもとに、十一人兄弟姉妹の次男として、モロッコのマラケシで生まれた。

両親は旧市街のユダヤ人地区で小さな雑貨屋を商っていた。通った小学校は旧市街の外にあり、イスラム教徒もユダヤ教徒も一緒で、仲がよかったのは旧市街に住むイスラム教徒の生徒だった。同じ地区に、母方の祖父が暗い家で一人暮らししていた。母以外は皆、イスラエルへ移民したからだ。心根の優しいヴァヌスは幼い頃、一人暮らしをする祖父を労る気持ちから、よく母の料理を届けていた。

一九四七、四八年にパレスチナでナクバが起きた。ナクバとは大災厄という意味のアラビア語で、パレスチナ人のホロコーストとも言う。一九四七年から四八年にかけて多くのパレスチナ人の村が焼かれ、破壊され、虐殺、追放された。

パレスチナを委任統治していたイギリスがまずパレスチナ人を追放したが、イギリス撤退後、ユダヤ軍がパレスチナ人を虐殺、追放、村を破壊した。第一次中東戦争で勝利したイスラエルは大幅に国土を広げ、世界的にシオニズム運動が盛んになるとともに、反ユダヤ思想が高まって、多くのユダヤ人がイスラエルへ移民し続けた。

少年期時代、ヴァヌス自身はユダヤ人だからと言って、偏見の目で見られたり差別されたことはな

かった。時々、市場などで大人同士がつまらない喧嘩をしたり、それにちよつと毛がはえたような殴り合いはあったが、「異教徒間の衝突」と呼ぶほどのことでもなく、アラブ人はユダヤ人に対してとても親切だった。

一九六三年に病床に伏していた祖父が死去した。イスラエルに移民するユダヤ人の勢いはますます盛んになっていた頃である。シオニズム運動の勢いに、ついに父は店を売り、イスラエルへ移民する決心をした。

イスラエルへの出発の日、母は子供たちにフランス風のオシャレな洋服を着せた。一家はマラケシから汽車に乗ってカサブランカに着いた後、船でマルセイユに向かった。マルセイユではドイツ政府のユダヤ人専用難民キャンプに一カ月滞在した。そこで、父はイスラエルで使用するための冷蔵庫や洗濯機を買った。それから大きな船に乗って、イスラエル北部の港町ハイファに到着した。

当時すでに都会となりつつあったテル・アヴィヴへの移住を父は希望したが、移民局は一家をイスラエル南部にある砂漠の町ベエルシェバに送り込み、政府支給の木造アパートに住まわせた。モロッコを発つ前に聞いていたこととは違っていた。

イスラエル建国当初、北欧から移民したユダヤ人とアラブ諸国から移民したユダヤ人との間には、移民当局の対応に差があった。ヴァヌヌ一家も、スファラデイ（アラブ諸国出身のユダヤ人）に対する差別を味わった。政府が支給したアパートには電気が通っており、せっかく買った電気製品は使うことさえできなかった。

ショックを受けた父は、数日家族の誰とも口を利かずにいたが、しばらくすると気を取り直し、町で仕事を見つけて働きたした。貧しい暮らしたが、働き者で節約家の父は、のちに小さな店を買い取って商売を始め、一家はユダヤ教正統派が多く住む地域に引っ越し、他の住民と同様、今苦しい思いをしても次の世代になればマシになるだろう、という希望を胸に、つましく暮らし、モロッコに住んでいた時よりもユダヤの戒律を厳格に守るようになった。

シヤバット（安息日）中はラジオが消されるようになり、父はシナゴーク（ユダヤ教礼拝所）に毎日出かけ、近所の人々からは宗教者として尊敬されるようになった。モロッコに住んでいた頃、外出時だけ髪を隠していた母は、家の中でも髪を隠すようになった。

父は息子たちをユダヤ教正統派の神学校ベイト・ヤコブ小学校に通わせ、息子たちが中学にあがると、神学校の寄宿舎に入れた。ヴァヌヌも、例外にもれず十三歳でイエシバ（ユダヤ教の神学校）の寄宿学校に入った。

中学生になったヴァヌヌは、生まれ故郷で自分が仲よく一緒に遊んでいたアラブ民族が、イスラエルでは差別され、惨めな待遇を受けているのを目の当たりにした。イスラエルで普通になされる、宗教による人種差別にヴァヌヌは首を傾げ、不信感を持ちはじめた。ロシア系やヨーロッパ系のユダヤ人に主導権が握られていた当時のイスラエル社会で、アラブ諸国からの移民が差別を受けていることにも疑問を抱いた。

成績は中ほど、クラスで特に目立つところのなかったヴァヌヌだが、ユダヤ教の研究よりも夢中に

なったのは読書とクラシック音楽鑑賞だった。

高校を卒業すると、国民の義務である兵役に就いた。理科系が得意だった彼は、陸軍戦闘工字部隊に配属され、工兵になった。一九七三年に第四次中東戦争が始まると、ゴラン高原に配置された。ここで、それまで胸に描いていたものとは異なる「戦争」の実態を知り、愕然としたヴァヌヌは、「周辺アラブ諸国はユダヤの敵であり、ユダヤ人が生存するためには戦争は免れない」と国が主張する戦争の正当性に、憤りを抱いた。

ヴァヌヌが二十八歳のとき、第一次レバノン侵攻（一九八二―八三年）が勃発した。戦争は罪のない人々を巻き込み、殺すことだと、過去の戦争体験で十分にわかっていた彼は、予備役として召集されたが、言われたとおり基地に行き、戦闘拒否を申し出た。「前線には行きません。基地の食堂で飯を作るだけならする。戦闘に関係のないことならやるが、前線には絶対行かない」と。

それまでイスラエルで戦闘を拒否する兵士はいなかった。ヴァヌヌの戦闘拒否に意表をつかれた軍部は対処方法を出しかね、ヴァヌヌを刑務所に入れることなく家に帰らせた。イスラエルの中心部テル・アヴィヴやエルサレムでは、平和活動団体のマツペンやイエシ・グブルーらによる反戦デモが開かれていた。ヴァヌヌと同じ考えで、当時戦闘拒否した者は全国に合計六十人いた。八三年に開かれた反戦デモには十万人の市民が参加した。

ガリコ 美恵子 (ガリコ・ミエコ)

1965年大阪生まれ。90年モロッコ系イスラエル人と結婚。91年娘ミリ出産後、夫の故郷エルサレムに移住。2カ月後、夫と別離。2度目の結婚も別離。

キブツ・ラマツ・ラヘルでボランティアメンバーとして半年暮らした後、テル・アヴィヴ北部でタイ食レストランのウェイトレスなどを経験。その後リション・レツィオンに移り水泳コーチなど。南テル・アヴィヴに暮らし、中学校の特別短期講師、日商岩井テルア支店秘書、スポーツマッサージなどさまざまな職に就く。エイラツで指圧業、エルサレムで中華料理店などを経て、現在は西エルサレムの靴屋で働く。

ビリン村での分離壁反対デモ、フリー・ジェルザレム、シェイク・ジャラ入植反対などイスラエル人平和活動に参加。パレスチナ伝統刺繍製品の販売向上活動、ヨルダン川西岸地区・東エルサレムでのオリーブ収穫ボランティア活動にも携わる。北海道パレスチナ医療奉仕団体コーディネーターを経て現在相談役。

人民新聞コラム“イスラエルに暮らして”を定期的に投稿中。反核の闘士モルデアイ・ヴァヌヌと2006年に出会い、交流を持つ。2016年8月15日テレビ東京の“世界ナゼそこに？日本人”に出演。

反核の闘士ヴァヌヌと私のイスラエル体験記

2017年1月20日 初版第1刷印刷

2017年1月25日 初版第1刷発行

著者 ガリコ美恵子

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装丁／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1589-3 ©2017 Galiko Mieko, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。